報告 595

学びへ向かう力を育てる国語科の授業・評価を目指して(2 年次)

－生徒による自己評価を生徒の意欲向上・教師の指導改善に生かす－

河合　ゆみ（京都市総合教育センター研究課　研究員）

生徒が自ら考えようとし，学び続けるためには，学習活動を通して何を学んだのか生徒自身が実感することが不可欠である。このような学びの自覚を得るためには，生徒自身が自分の学びを振り返ることが必要であり，その振り返りが自己評価として機能していることが重要であると考えた。自己評価としての振り返りを行うことで，生徒自身が学びの自覚を得ることができ，次も考えようという意欲につながる。また，生徒の自己評価は教師が生徒の学びを振り返る際にも有益な情報をもたらし，指導改善へとつなげていくことができる。そこで，自己評価として機能する振り返りを目指して研究を進めた。

第１章　生徒の意欲向上と教師の指導改善につながる自己評価を目指して

第１節　有意義な振り返りとするために

授業における振り返りの重要な役割は，自己評価として機能することである。生徒の自己評価には，個人内評価として見ることができる側面と目標と照らし合わせて見ることができる側面があると考えた。個人内評価は，生徒個々のもつ良さや感性，伸長や頑張りを認めるものである。振り返りには，単元，学期，年間など一定の期間の学習を通して，生徒自身がいかに変容したか自覚するという役割もある。このとき，生徒は前の自分と今の自分,今の自分に至るまでの過程を振り返り，自分の基準の中で「最初はこうだったけれど，今は」と自分の変容を肯定的に受け止めることになる。このような生徒の振り返りに対しては，外的な教師の評価基準によって認めることよりも，その生徒自身が振り返ったことを尊重し，認めていくことが大切であり，学び続けようとする意欲を支えることになる。昨年度の実践は，単元を通しての自分の学びの変容を自覚し，個々の変容を教師が認めることによって次の学びへとつなげていくものであった。

一方で，目標に対してどうだったか自分で判断するという自己評価の側面も重要である。従来から言われている「めあてと振り返り」の振り返りもこの側面に焦点を当てたものだと考える。「めあて」とは，教師が生徒に提示し，生徒自身が意識しながら授業に取り組んでいけるようにするものであり，その「めあて」に対しての自己評価とは，本来生徒自身が自分で基準を決めて，「めあて」に対してどうだったか判断するものである。しかし，このような自己評価は生徒個々によってばらつきが生じやすく，的確に行うことは難しい。生徒が的確な自己評価を少しでもできるように，教師が視点を与えることが必要であると考えた。また，「めあて」には，教師の「ねらい」が含まれていることを考えると，授業という枠組みの中においては，教師の基準（外的基準）から判断したことを生徒に返すことによって，生徒自身に自分の自己評価がどうなのか見つめ直す機会を与え，学びの自覚もより確かなものとしていけるのではないかと考えた。そこで，今年度は，目標に照らし合わせた自己評価に焦点を当てることで，より生徒の学びの自覚を促すとともに，生徒の自己評価を授業づくり，指導改善に生かしていけるのではないかと考えた。

第２節　目標に照らし合わせた自己評価

目標に照らし合わせた自己評価の在り方を考えていくにあたって，以下の二点が要となると考えた。

①学んだことの確認をする。
②自分の中で解決できていないことは何か意識する。

今年度も，昨年度同様「読むこと」の教材で実践している。国語科の「読むこと」の学習において，①の何を学んだかは，どのような読み方をし，その結

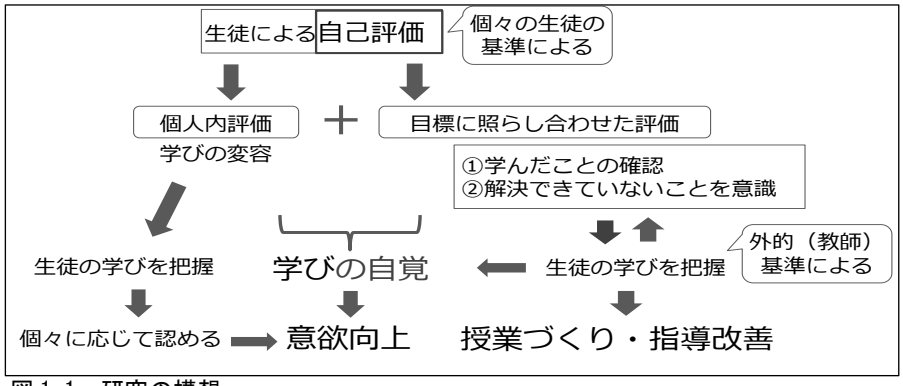


図 1-1　研究の構想

果何を考えたかということである。そして，②は学習後にも，なお納得できていなかったり，答えが見い出せなかったりした自分の中での課題を意識することである。課題を自分の「問い」として意識することで，次の学びにもつながっていくのではないかと考えた。表面図 1-1 は，研究の構想を示したものである。

第２章　自己評価として機能するために

第１節　仲間との対話を取り入れた授業作り

生徒自ら学びを自覚するためには，学習後の振り返りの場面だけが重要なのではない。振り返りの場面に至るまでの学習活動がどのように行われたのかということが重要である。特に，仲間との対話が効果的に取り入れられているかどうかが肝要であり，効果的な対話とするためには課題設定が重要であると考えた。ここで言う仲間とは，同じ学級で共に学ぶ生徒同士のことを指している。国語科（「読むこと」）の学習において，主体的で深い学びにつながるような対話とするためには，「様々な客観的根拠が収集可能であり，一人一人の生徒の価値観を反映できる多様な意味づけも可能な答えが導き出せる」課題が望ましいと考えた。また，そのような課題が設定されても，生徒が仲間と対話をすること自体に課題を抱えている場合がある。そのような場合も考え，対話の進め方や対話の形，取り入れ方について記した。

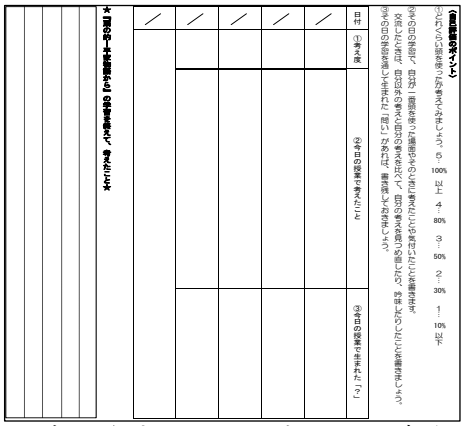
第２節　自己評価シートの二つの要点

自己評価シートの作成にあたって，「学習の内容を確認する」「問いを意識する」という二点を意識した。ここで言う「問い」とは生徒自身が授業を通して抱いた「問い」のことである。学習を振り返る際，学習後の自分の「問い」を把握することで次の学びにつながっていくのではないかと考え設定した。また，教師が生徒の「問い」を把握する要点として，学習過程（ここでは「読むこと」）に応じて「問い」を四つに分類した。表 2-1 は，「問い」の分類である。

表 2-1　「問い」の分類

把握↓解釈↓形成	①一つの答えが得られる「問い」。一問一答。
	②本文に書いてあることを根拠として，ある程度、答えが絞れる「問い」
	③本文に書いてあることを根拠として，多様な答えが導き出される「問い」
	④書いていることを踏まえ，人それぞれの自分の考え方が答えに反映される「問い」

「学習の内容を確認する」ことについては，生徒がどのような記述をするのか，生徒の記述から教師が得られる情報にはどのようなものがあるのかということを考察したいという研究の趣旨もあり，「今日の授業で考えたことは何か」という自由度の高い項目を設定した。表 3-1 は，実際に使用した自己評価シートである。表 3-1　自己評価シート



「考え度」とは，授業の中でどれくらい一生懸命考えたか 5 段階で評価するものである。「考え度」について考えることで何を考えたかも書きやすいのではないかと考えた。生徒の感覚ではあるが，数値の変容や記述との関係等から得られるものもあると考えた。

第３章　実践授業を通して

第１節　生徒が主体的に学ぶ授業を目指して
－『扇の的－「平家物語」から』－

実際の授業の流れと要点を示すとともに，生徒が対話をしながら読みを深めていく様子，自己評価をする中で見えてきた様子を記した。また，自ら考えようとする姿を生み出した要因を考察した。

第２節　自己評価シートの活用

1 時間ごとの自己評価シートに記された生徒の「問い」を授業作りに生かす様子について記した。また，単元学習終了後に回収した自己評価シートをもとに，上手くいった要因と課題について考え，次の指導に生かしていく視点について考察した。

第４章　今後に向けて

第１節　より充実した自己評価を目指して

自己評価シートから見えてきたことをもとに，1 時間ごとの自己評価の在り方，単元学習後の自己評価の在り方を提案した。

第２節　「主体的に学習に取り組む態度」

今回焦点を当てた目標に照らし合わせた自己評価と，評価の観点「主体的に学習に取り組む態度」とのつながりついて述べた。